

稲の生育期とイネカラバエによる傷穂発生との関係について

糸賀 繁人・馬場口勝男  
(鹿児島県農業試験場)

IROGA, S. and BABAGUCHI, K.  
Relation between the Development of Damaged Ears by Rice Stem  
Maggot and the Planted Stage of Rice.

1. はじめに

イネカラバエの被害は葉被害と穂被害に分けられるが、経済的な面から考えると、傷穂の有無が最も問題があるように考えられたので、傷穂防止に関する研究の一環として、稲の生育期と傷穂発生との関係について検討を行ったので、その結果を報告する。

2. 試験方法

谷山市上福元町、県農試陸稲圃場において採集した成虫を、室内でポット植の稲に産卵させ、孵化直前になつて小型シャーレの水を満した中に入れて孵化させた初令幼虫を、1/2万ワグネルポットに4月1日に播種して栽培しておいた岩手クルミ(早期陸稲)に、毎回1茎2頭宛、主稈の未展開葉基部に接種して検討した。幼穂形成時期は、ポットと同じ日に播種した圃場一般栽培のものについて調査を行い、幼穂長が1~2mmに達した時をもつて幼穂形成時期とした。被害状況はいずれも7月28日に調査した。

3. 試験結果

第 1 表

区 別	事 項	供試	被害	被害	総粒	被害	被害
		穂数	穂数	穂率		粒数	粒率
				%			%
1)	5月20日接種(幼穂形成前23日)	14	1	7.1	1,228	38	3.0
2)	5月30日 " ( " 13日)	20	4	20.0	1,754	68	3.9
3)	6月7日 " ( " 6日)	16	15	94.0	1,403	740	52.0
4)	6月21日 " (幼穂形成後8日)	10	0	0	877	0	0
5)	6月27日 " ( " 14日)	4	0	0	351	0	0

註：幼穂形成期…6月13日。

4. 考 察

1) 調査の結果は第1表に示す通りであるが、5月20日の第1回接種のものから傷穂が認められる。その後は2~3回と傷穂差は漸次増加し、6月7日の第3回接種になると、殆んど大部分のものが傷穂となる結果を示した。しかし、第4、5回になると、傷穂は全然みられなかつた。

2) これ等の関係を幼穂形成時期からみると、傷穂の認められた第1回から第3回迄のものは、いずれも幼穂形成前の接種であつて、傷穂の認められなかつた第4~5回は幼穂形成期後の接種となつている。更に又、傷穂の認められたもののみについてみると、早く接種されたもの程傷穂は少なく、幼穂形成期に近づくに従つて傷穂の出現率が高くなつている。

3) 以上のようなことは、結局被害回避によつてもたらされた結果と思われるが、傷穂の出現は幼穂形成時期と、イネカラバエ幼虫の食入時期との間に密接な関係のあることが推察される。この場合、幼穂形成期前6日頃の食入虫が最も問題があるように察せられるが、決定的なことについては、今後に残された問題と思われる。